

激動の変化を遂げる中華人民共和国 広州日本人学校（Japanese School of Guangzhou）の実践

前広州日本人学校 教諭

現北見市立美山小学校 教諭 天野 昌明

1. はじめに



女満別空港で

平成17年4月3日、私たち家族4人は、女満別空港14時50分発東京羽田行きの機内で離陸を待っていた。ふと窓の外に目を向けると、呼人の地域のみなさんや、教職員のみなさんの姿が見えた。搭乗ゲートでお別れしたあと、寒い送迎デッキで1時間以上も離陸を待ってくれたのである。「中国でも頑張れ!」という手づくりの横断幕と、私が見ているかどうかかわからないのに手を振ってくださるみなさんの姿は、生涯忘れられない。感謝の気持ちで涙したと同時に、今ある自分は多くのみなさんに支えられているのだという責任をあらためて考えたのである。

あれから3年の月日が流れた。振り返ればあっという間の一言である。生活に慣れない1学期は長く感じたが、夏休み以後は、1年目、2年目とどんどん過ぎていった。気付いた時には帰国の手続きをしている自分がいた。そして現在は、北海道網走管内の教員としてまた多くのみなさんにお世話になっている。

平成17年から平成20年3月の帰国までの日々は自分にとっても家族にとっても、激動の日々であった。多くの人と出会い、多くのことを

学び、楽しい3年間であった。つらく苦しかったことも、今思えばよい経験である。全てが二度とできない貴重な経験である。

その3年間のことを、可能な限り綴っていきたいと思う。

2. 現地の様子

(1) 地理・歴史

広州市は、広東省の省都として、華南地区の政治、経済、文化の中心都市である。香港、マカオにも近く、古くから中国の南の玄関として外国との交流も盛んであった。中華人民共和国成立後、毎年4月と10月に開かれる広州交易会（中国輸出商品交易会）は2007年に100回目を迎えた。

広州市は、珠江下流の三角州（珠江デルタ）の北側に位置している。北緯23度8分、東経約113度17分に位置し、北回帰線が市の北方約40kmの地点を通っているため、夏至のころには影が自分の真下にあるということが体験できる。



広州市内の様子

区部と校外の4市（県級）を合わせた総面積は7,434.4 km²、そのうち市区は1,443 km²である。地形はおおむね平坦で、海拔は15～2

5 m, 市郊外にある白雲山が一番高く海拔372.3 mである。総人口は975.46万人である(2006年度末)。

言語は普通語(北京語)と広東語が混在している。普通語が話せれば、日常生活で困ることはない。英語は、現地の学校教育でも力を入れていることもあり、若者の一部でコミュニケーションが可能である。英語は、ホテルやデパートなどでも通じるが、それはごく一部である。英語のみでは日常生活は難しい。

近年は、日本語を学ぶ中国の学生が多い。広州市内の大学にも日本語学科があり、それらの卒業生を日本人学校が職員として採用して通訳をお願いしたり、家庭教師として個人的に中国語を学んだりしている。

気候は亜熱帯に属するが、気候の起伏がある。夏は長く高温多湿、冬は日本に比べて暖かい。年平均気温は22℃である。しかし、北海道出身の自分にとっては暖房設備が充実していない分、冬の寒さは厳しく感じた。冬は防寒具を身につけたまま授業を受けるという光景がみられ、ジャンパーを着たまま寝床に入るということもあった。

年間降水量は1506 mmで3~9月は雨季(高温多湿)になり、時折、昼が夜になり激しい雷と雨に見舞われることがある。11月から1月は雨も少なく、気温も15~20℃で1年間の中で一番過ごしやすい時期となる。その2月に春節(旧正月)を迎えるのである。

広州という地名は、三国時代、紀元226年に呉の孫権が合浦から北側を広州とし、南側を交州としたことに由来する。民間伝説によると、20



越秀公園内にある五羊石像

00年余り前、5人の仙人がそれぞれ違う色の衣服をまとい、稲穂をくわえた5色の羊にまたがって天から降りてきて、5種類の穀物の種をこの地に贈り、五穀豊穰の地としたことから、広州は別名、五羊城、羊城、穗城とも呼ばれるようになった。市の北側にある越秀公園内には、その伝説を示す五羊石像があり観光スポットとなっている。

近代史においては、1841年5月にアヘン戦争があり、広州市内にその跡(鎮海楼、大砲など)が残っている。また、当時租界となった沙面には、現在も当時の商館などが残っている。



1800年代の建物が残っている沙面

(2) 治安と環境

自分自身の安全意識、危機管理、危険地域の認識をもって行動することを怠らなければ、広州市は安全、安心である。しかし、凶悪な犯罪がないわけではない。

スリや置き引き、引ったくり、詐欺などによって金品や旅券などを取られるケースは後を絶たない。また、交通マナーが悪く、交通事故による死亡者数が月160人を超えることもある。広州日本人学校の内規により、教職員による自動車等の運転は禁止されている。

ただし、公安当局の取り締まりが厳しくなり、交通事情を含む治安は、かなり改善されている。

環境問題は、改善されつつあるものの、まだ十分とは言えない。工業の街でもある広州市は、特に大気汚染が深刻である。日中の町なみが白くくすんで見えたり、太陽が赤く見えたりするのはよくある。日本の公害問題を扱っている書物などで

見たことのあるような昭和30～40年代の光景である。テレビでは、台風や大雨の情報に加えて大気汚染の状況も配信されている。大気汚染を示す指数が高いときには、日本人学校でも屋外の活動を控えたり禁止したりすることがある。中国の経済成長と環境保護を同時に進めていかないと、かつての日本が経験した道を歩むことになるのではないかと思う。

(3) 教育事情

中国では、中央政府に教育部が置かれ、教育全般を統括している。地方の省・自治区・直轄市および県・市(区)には教育委員会(教育庁・教育局)が設けられている。

広州市の学齢児童の入学率はほぼ100%である。満6歳から7歳で小学校に入学する。新学期は9月からで、教科書は各家庭が書店で購入することから、この時期の大きな書店には教科書が大量にならべられている。

小学校(現地では“小学”と書く)は6年制で、初級中学(日本の中学校に相当する)、高級中学(日本の高校に相当する)、大学とあり、それぞれ3・3・4制である。

各学校の校門で「広東省一級」とか「広州市一級」というような表示をよく目にする。これらは特別な審査、児童の成績などにより申請を受けるものらしい。

特徴としては、まず、学校にお昼寝の時間があることである。学校給食はなく、お弁当という習慣もないため、お昼休みは自分の家に帰ったり、外で昼食を買って食べたりしている。学校にはお昼寝の部屋があり、マットと毛布、枕が敷き詰められているような施設を持つところもある。

また、中学や高校などでは、夕食後も学校で自習をするということがあり、午後9時過ぎまで学校で過ごすことが日常的にある。

一人っ子政策が続く中国では、我が子への教育に対する親の期待が大きい。放課後や休日は、少年宮などで習い事をしたり、学校の宿題や家庭学習に費やしたりする時間が多い。

ただし、これらの教育事情は都市部に限ったことである。個人的には農村部の状況はつかめないが、教科書をそろえることすら困難であることは容易に想像できる。英語教育なども、広州市の東風東路小学では小学1年生から行っているが、中国全土がそうではない。この面から考えると、日本の教育制度は、日本のどこにいても等しく保障されているという点で、大変優れている。

(4) 反日デモ

私が派遣された平成17年4月は、反日デモのまさにピークであった。NHKのテレビニュースやインターネットから配信される情報で逆に驚いていた。多くの方々から心配のメールが届いていたが、生活しているものにとっては、他人事のように思っていたのも事実である。

この時期に思ったのは、いつどんなことがきっかけで、身のまわりの状況が変わるかもしれないということである。派遣先が中国・広州市と決まった平成17年の1月以前は、日中関係に大きな問題はなく安定していた。それが徐々に雲行きが怪しくなり始め、教科書や領土問題、政治家の発言、靖国神社参拝に関わることなどで安全な地域が危険地域へと変わったのである。渡航直前に、これから家族4人が生活する地域が、反日デモで脅かされている映像を見て、不安を感じていたことが忘れられない。

同年4月6日に白雲国際空港に到着し、真っ先に言われたのが、「日本語をしゃべらないでください」であった。次に「不要不急の外出は控えなさい」「人が多く集まる場所には行ってはいけない」であった。街では「愛国無罪」を合言葉に、破壊行動が行われている。日の丸が焼かれているのをマンションの窓からみている小学生がいる。人にまで危害が及ばなかったが、日本料理店は投石を受けた。タクシーの乗車拒否は日本人がどうのこうのではなく、日本人を乗せているということで襲われるのを避けたいためである。これらの変化は1～2ヶ月で起こったことである。情勢は不変ではない、危機管理は常に持たなければなら

ないことを痛感した。

ただし、反日デモはこの時だけで、以後は政治の面でも友好関係が築かれた。身のまわりの中国の方々は、みな優しく親切で思いやりのある方ばかりであった。同じ人間として、相手を思いやる心は世界共通であるということは揺るぎない。国や文化、言語が違って、相手を大切に思う気持ち大切なのだと思う。

(5) 食文化

「食在広州～食は広州にあり」という言葉がある。現地には「2本足は親以外、4本足ならテーブル以外食べる」という広東料理を表す言葉もあるくらいである。中華料理・広東料理はまさに圧巻である。



朝も昼も、飲茶でにぎわう酒店（レストラン）

水道水は硬水のためそのまま飲用することはできない。ミネラルウォーターや蒸留水を購入している。1996年7月に日系スーパーのジャスコがオープンし、さらに日本食レストランなどの急増により、こだわらなければ、ほとんどの日本食や日本製品が手に入るようになっている。

(6) 経済

反日デモに表されるように、政治の面では冷えている日中関係も、経済の面では逆である。1972年に、日本と中国の国交が回復し、70年代後半には中国の改革開放政策により、日系企業の進出が増えた。広州市の産業は自動車・石油化学工業・機械設備製造・鉄が中心であるため、関連

した日本企業の進出がめざましい。それに伴い、広州市に滞在する日本人の増加、同時に日本人学校の児童・生徒数が急増したのである。

GDP（国内総生産）は1990年に300億元だったのが、2006年には6000億元と、16年で20倍に成長している。しかし、急速な発展に伴い、広がる格差と貧富の差は大きな問題である。

(7) 医療

我が子を連れて海外での生活となるのに、親として一番心配したのが医療である。言葉が通じないと、西洋医療がどこまで浸透しているのかが不安だった。

しかし、一言で言えば「問題なし」である。最新の医療が望めるわけではないので、手術や出産などの場合は帰国する方が多い（現地で出産した方もいる）。一般的な傷病では、現地の病院で問題ないし、費用は高額だが、外国人対応の病院であれば日本語通訳が常勤し、西洋医学を学んだ医師の治療を受けることができるようになっている。

日本人学校でも、保険が適用する提携病院がある。私個人では、薬を内服したり、子どもが入院したり予防接種を受けたりといった経験をした。

(8) オリンピック、そして、アジア大会

今年、北京でオリンピックが開催された。中国国内外には民族問題や内政に対する不満、食の安全の問題、最近ではテロの問題と課題が山積みで、オリンピックが無事に終わるのだろうかと心配だった。ただし、オリンピックは北京市のことであり、広州市は2010年のアジア大会に照準を当てた開発が急ピッチで進んでいる。私が生活した3年で、急激な変化を遂げている。地下鉄の建設、市内のバイク乗り入れ禁止、バイクタクシーの廃止、町並みの変化、観光名所の建設などいろいろと様変わりをしている。

3. 広州日本人学校の様子

(1) 概要



24時間警備の広州日本人学校正門

広州日本人学校の前身は、1982（昭和57）年10月に開校した「広州補習授業校」である。当時は日本総領事館のある東方賓館の一面を借りて授業が行われていた。児童3名、講師1名のスタートであった。

1989（平成元）年6～8月には、天安門事件の影響で補習授業校の機能を停止した歴史がある。

1995（平成7）年3月に、広東省教育庁より日本人学校としての開設許可がおり、同年4月から広州日本人学校として新たな歴史がスタートした。児童生徒数の増加に伴い、補習授業校の時代には東方賓館から花園酒店、日本人学校の時代には花園酒店から広州市一番の高層ビルの中信ビルへと引越し、2003（平成15）年には現在の地に校舎を建築した。約5000㎡のグラウンドと、25mの室内プール、3階建ての教室を持つ校舎である。

新校舎を建設した翌年には、今後の児童・生徒数の増加を見越して、校舎増築委員会が設立された。2006（平成18）年2月には、約5200㎡の土地を新たに借り受け、新しいグラウンドと5階建ての増築校舎が完成した。新しい校舎を小学部校舎、これまでの校舎を中学部校舎として、広く落ち着いた環境が整った。増築工事が続く中、運動会や創立10周年記念学習発表会、記念式典が行われたのである。

2007（平成19）年度4月現在で児童・生

徒数は360名余りであった。教職員は文部科学省からの派遣教員と、財団派遣教員、現地採用教員を合わせて25、6名である。他に、現地スタッフのみなさん、警備のみなさんがいる。

児童生徒数は、2005（平成17）年の反日デモにより一時伸び悩んだが、私が勤務した3年間に毎年100人近くが増加した。日本人学校は私立の学校であるという立場からすると、児童・生徒数の確保は切実な問題である。また、日本企業の中国への進出は目を見張るものがある。

学校教育目標は「国際社会の中でたくましく『生きる力』をもった児童・生徒の育成」である。国際社会の中でたくましく生きる日本人としての自覚をうながし、確かな知性、豊かな人間性、社会性を育成すること。自ら学び自ら考える力を育てるとともに、国際社会の中でたくましく生きる力を育てること。ゆとりある教育活動を展開する中で基礎・基本の確実な定着を図り、個性を生かす教育を充実すること。海外にある在外教育施設であるという認識のもと、創意工夫に努め、特色ある教育活動、特色ある学校づくりに配慮することを方針としている。

学校教育自体は、日本の小中学校と同じ教育を、日本の法令等に即して行っているので大きな違いはない。特色ある学校づくりという面から、現地理解教育や外国語活動に力を入れるとともに、保護者の期待も大きい。

課題としては、限りある体制の中で特別支援体制を充実させることと、基礎・基本の確実な定着とともに、特色ある教育活動（現地理解、外国語活動など）を充実させていくことである。現在、広州市内には、日本人学校のほかに、現地校、インターナショナル校がある。保護者は必ずしも日本人学校を選択するわけではない。児童・生徒数は増加しているが、インターナショナル校などを選択する数も増えている。日本人学校創立の思いに返ること。児童・生徒一人ひとり、全ての保護者を大切にすること。児童・生徒の成長を大きな視点でとらえながら、今この時にできることを実践していくことが大切であると考えます。

(2) 現地での実践

① 総合的な学習の時間

2002年度から総合的な学習の時間が完全実施となった。それ以前の移行期間から、自分なりに実践を積み重ねてきた。日本人学校でも地域の歴史を学び、児童とともに単元開発したいという願いを持っていた。

派遣1年目は5年生の担任で、創立10周年という節目の年でもあった。事前に広州日本人学校の歴史を調べ、関係する文書や写真などを集めながら教師としての大まかな単元計画を立てた。そこで児童につけたいと考えた力は次の3点である。

- ・ 自分の身の周りを見つめる
- ・ 多文化共生
- ・ コミュニケーション能力

児童に対しては、前学年までの学習を振り返らせ、児童の学びたいという思いを明らかにした。

単元開発していく中で、重要な役割を果たしたのが『穂学』という学校文集と、かつて在籍された教職員のみなさんとのつながりである。過去に編集された全ての学校文集に目を通すと、その時の児童や教職員の思いにふれることができた。また、過去に在籍された教職員とはメールでやり取りすることによって、校歌や校章などが決定するときの経緯や思いにふれることができた。時を越えて、人と人がつながり、人の思いを共有することができたのである。



自己課題からグループの課題を話し合う5年生

毎年2月に行われる学習発表会では、1年間の

総合的な学習の時間に調べたことをもとに学習劇を作って披露した。これまでの学校の歴史と、当時の人々、現在の人々の思いを5年生全員で演じ、発表することができた。

② 英語活動の授業

派遣2年目は1年生の担任である。どの学年でも学級経営が基盤である。それが、学校経営の基礎であることも同様である。

この年から、広州日本人学校の外国語活動をどうするのか議論された。特に、英語活動は保護者からの強い要望もあり、全学年週2時間と朝の活動の時間を英語活動に当てることとなった。さらに、学校としての英語活動のおさえ、年間計画の作成、単元開発、そして実践の蓄積を全体の研修としていくこととなった。

「小学校低学年の英語活動の在り方」を個人研究のテーマとした。その際に大変参考となったのが「網走管内教育作り研究会」の研究やレポートである。会報が発行されるたびに、日本から送付してくださった先生には、大変感謝している。

1年生に英語活動を進めていくにあたり、次の3点をねらいとした。

- ・ 英語活動のねらいを明確にすること

「慣れ、親しむ」ということを大きなねらいとし、日常の遊びやゲームと関連付けながら、音声を中心にした活動を作っていくこと。

- ・ コミュニケーションの力

英語に慣れ親しみながら、自国や他国の言語や文化を理解し、積極的にコミュニケーションを図ろうとする力を育てたいと考えた。わかった・わからないなどの意思表示や、感情表現などは日常的に繰り返し使うことで無理なく定着させること。簡単な受け答えや意思表示、感情表現などを低学年の段階から日常的に指導していくことは、英語活動そのものと、自国や他国の文化を知るためのスタートであると考えた。

- ・ 日常の活動との関連

音声を中心にして、英語に慣れ親しむことをねらいとした活動において、日常の学習活動や生活と関連させることが大切である。年度始めに英語活動のねらいや大まかなテーマを決め、他教科、行事などとの関連、他学年との系統などを考えた。



小学1年生の英語活動の様子

また、担任が行う英語活動として、教師の英会話力の向上が必要である。楽しむことを前程にして、教師がクラスルームイングリッシュを多用していくことで学ぶ環境作りの一つとなる。さらに、教師自らが学ぶ姿を児童に見せることで、児童の意欲化へとつながるものと考えた。

③ 学校行事

派遣3年目は6年生の担任となった。児童の卒業と自分自身のことと重なり、決意も新たな1年となった。

6年生は、学校の中核となる学年である。ただ、中学生も同じ学校にいることから、最高学年としての自覚をもたせることが難しい現状である。

6年生には「修学旅行」という学校行事がある。特徴は児童も教師もパスポートを持っているということである。小学校は2泊3日でマカオへ、中学校は3泊4日で北京への旅行となる。パスポートを持ち、税関を通り、児童のパスポートを保管することは大変な緊張であった。また、児童の安全が第一でありながら、その中で、単に見て終わりの旅行ではなく、事前・事後の学習を通して調べたり、まとめたりする活動を大切にしたい。



世界遺産 セントポール寺院の前で

マカオへの修学旅行では、マカオと広州、マカオと日本との関係や、世界遺産となったマカオの施設などを調べた。また、児童と教師による修学旅行実行委員会を組織し、修学旅行のねらいや決まりなどを、ともに考えていく姿勢を大切にしたい。

修学旅行後は、自分なりの表現方法で、調べたことをまとめ発表した。

④ 国際理解教育



現地校（東風東路小学）との交流

派遣3年目に、国際理解教育部の担当となった。学校として、国際理解教育の目標を次の4点に定めた。

- 互いに尊重し、相手の立場に立って考える態度や心情の育成。
- 相手の立場を尊重しつつ、自分の考えや思想を表現できる能力の育成。
- 広い視野をもち、自他の文化を理解し、尊重する態度の育成。

・国際社会において連帯・協力する態度の育成。

具体的には、年2回の現地校（東風東路小学）交流の推進、中国の文化伝統を学ぶ会の企画、中国語会話・英会話の日常化と継続である。

現地校交流では、学年ごとに交流内容を練り、事前に教員間で打ち合わせを行い実践した。児童の中には中国に対する否定的なイメージを持つ子がいる。部活動や少年団活動などの関係で中国での生活自体を否定的にとらえている子もいる。この交流を通して、国や文化を超えた人としてのつながりを大切にする気持ちが育ったものと考えている。



粵劇の化粧を体験する中3男子

中国の文化伝統を学ぶ会は、中国音楽、中国雑伎、獅子舞、粵劇などの体験と鑑賞を企画して目標に迫った。

中国語会話・英会話の日常化については、児童・生徒の委員会活動と連携して、月ごとに単語や会話文の重点を決めて、学級ごとに楽しみながら身につけていく活動を推進した。



アメリカンスクール主催のサッカー

⑤地域活動

部活動や少年団活動が難しい環境にあるため、現地の日本人保護者が中心になり様々な活動が行われている。日本人を対象にした野球教室、将棋教室、商工会主催の新年会、アメリカンスクール主催のサッカーや野球、テリーフォックスラン、音楽会の開催など家族とともに参加し、地域で子どもを育てるという考えに賛同した。

4. おわりに

3年の日本人学校勤務を無事終え、平成20年3月18日の夜の便で女満別空港に到着した。そこには、我が子の同級生や呼人小学校の先生方、ご家族のみなさんの姿があった。3年ぶりだと誰だかわからないくらい成長している人もいた。3年前に見送られ、今度は夜遅くに迎えてくださるみなさんの気持ちに、感謝でいっぱいである。

日本人学校の教員としてがんばってみたい、がんばっている子どもや保護者、地域のみなさんのために自分ができることをしたいというのが自分の夢であった。その機会をいただき、3年の勤務を終えた今、自分が得たもの、学んだもの、見たり感じたりしたものを、地域の子どもたちや保護者のみなさんに返していくことが、お世話になった多くのみなさんへの恩返しだと思っている。支えてくれた家族にも感謝している。

「一人ひとりの子どもを大切に、そしてその子ども達を支える保護者のみなさんも大切にする」という言葉と、「みんな違って、みんないい」という言葉を座右の銘として、多くのみなさんに恩返ししながら、これからの教員生活を歩んでいきたい。



平成19年度 広州日本人学校 卒業証書授与式